



『夢をかなえるゾウ』（水野敬也、文響社）に登場するガネーシャは、夢を見付けるための第一歩を「本当に好きなことを見付けること」だと言います。「好きこそものの上手なれ」のことわざの通り、「好き」なことには夢中になります。夢中の世界だから夢を描き始めることができるのでしょう。大人になるにつれ増えていく「やるべきこと」。だからこそ「やりたいこと」を追いかける子どもの姿がうらやましく映ります。今回は、夏休みに「やりたいこと」を追いかけた3人を紹介します。

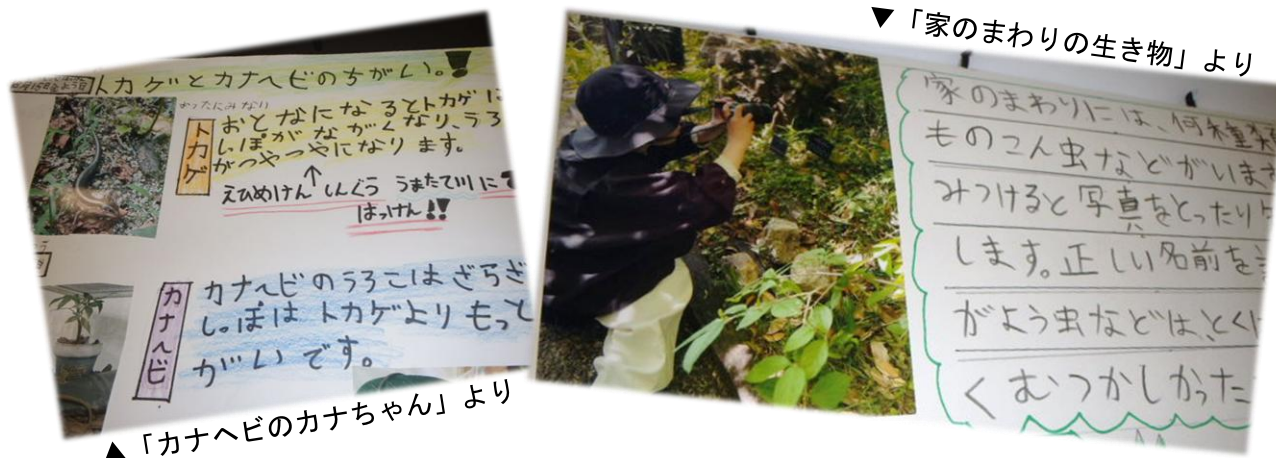
「好きこそものの……」を超えて

一人は料理に打ち込んだ5年生の児童です。「わたしの夢につながる」という作文を書いてきました。この児童が初めて作ったのは、ウィンナーと卵を乗せたご飯。家族が喜んでくれたので、オムライスにも挑戦しました。そして、毎日ご飯を炊いてお母さんの帰りを待っていたそうです。その作文の最後の部分です。

ご飯を作る楽しさ、作ったものを食べてくれるうれしさは、がんばった分、ひとしおです。だれかが私のご飯を食べて、おいしいと思ってくれたら、うれしい気持ちになってくれたら、それが私の幸せです。5年生では家庭科で調理実習もします。夢への第一歩としてがんばっていきます。

担任によれば、この子が「2分の1成人式」で描いた夢も「調理師になること」だったそうです。夢への道を着実に歩んでいます。

続いては、自由研究でカナヘビや昆虫など、身の回りの生き物を調べてきた2人です。



「カナヘビのカナちゃん」をまとめてきた2年生の児童は、「夏休みにとても楽しかったこと」の一つに、「山の川に行ったとき、トカゲに会えたこと」と書いていました。トカゲとカナヘビの違いもよく分かっていない私が「いったい、トカゲのどんなところが好きなの？」と質問したら、身振り手振りをつけながら「口がこうなって、こうなっているところが好き」と答えてくれました。

「家のまわりの生き物」の自由研究に掲載されている生き物の写真は、なんと88枚。それだけ撮影を繰り返した彼ですから、カメラを構える姿にも風格を感じます。上に掲載した写真のように、すでにいっばしの探検家です。

中国の思想家・孔子は「これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」という言葉を残しました。

「好き」という気持ちを超えて、自分で実行したり、調べたり育てたりと、「これを楽しむ」姿が、今日紹介した3人にはあります。小学生にして、孔子の説く最上の道を歩む3人です。

これを知る者はこれを好む者に如かず。
これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。
(孔子『論語』より)